

出品作品リスト

桃山時代という時代表記について

政治史では織田信長が入京した1568年、もしくは信長が室町幕府の將軍足利義昭を追放した1573年から、徳川家康が江戸幕府を開いた1603年の前年までを「安土桃山時代」として年単位で区切られています。

一方の美術史では作品の様式から総合的に判断して、豊臣家が大坂夏の陣で滅亡する1615年までを「桃山時代」とするのが一般的です。

しかし、陶磁器の場合、桃山様式のやきものが1615年以降も生産され続けられることから、本展では一応の目安として、1620年代頃までの作品を対象としています。

出品№	作品名	コレクション	作品管理番号	寸法(cm)	時代
1 楽 焼	黒楽茶碗 銘「次郎坊」長次郎作	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-62	高さ8.4 口径10.4 高台径5.0	16世紀末
2 美濃焼	黄瀬戸縁鉢	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-44	高さ5.3 口径16.3	16世紀末～ 17世紀初期
3 美濃焼	志野筒茶碗 銘 露香	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-65	高さ9.8 口径10.3 高台径5.4	16世紀末～ 17世紀初期
4 美濃焼	志野四方向付 四口	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-108	高さ5.0 幅8.8(各)	16世紀末～ 17世紀初期
5 美濃焼	織部杏茶碗 銘「浜千鳥」	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-71	高さ8.3 口径14.6 高台径6.2	17世紀初期
6 美濃焼	織部角切透鉢	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-48	高さ10.2 口径22.7×21.5	17世紀初期
7 備前焼	備前矢筈口水指 共蓋	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-94	高さ17.7 口径10.4 底径18.4	16世紀末～ 17世紀初期
8 備前焼	備前鶴首徳利	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-111	高さ21.1 胴径11.2	16世紀末～ 17世紀初期
9 伊賀焼	伊賀種壺花入	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-93	高さ25.1 最大径15.3 底径11.8	17世紀初期
10 伊賀焼	伊賀伽藍石香合	福岡市美術館 (松永コレクション)	6-Ha-87	高さ5.1 幅5.5	17世紀初期
11 唐津焼	奥高麗茶碗 銘「舟越」	田中丸コレクション	3	高さ9.7 口径14.7 高台径6.2	16世紀末～ 17世紀初期
12 唐津焼	奥高麗茶碗 銘「閑窓」	田中丸コレクション	4	高さ9.7 口径15.7 高台径6.1	16世紀末～ 17世紀初期
13 唐津焼	絵唐津菖蒲文茶碗[重要文化財]	田中丸コレクション	5	高さ9.2 口径12.0 高台径6.3	16世紀末～ 17世紀初期
14 唐津焼	絵唐津木賊文茶碗	田中丸コレクション	6	高さ9.1 口径12.5 高台径4.8	16世紀末～ 17世紀初期
15 唐津焼	絵唐津鳥文杏茶碗	田中丸コレクション	18	高さ6.4 口径15.4 高台径6.5	16世紀末～ 17世紀初期
16 唐津焼	朝鮮唐津花入 銘「和美助」	田中丸コレクション	114	高さ20.2 口径9.5 底径9.2	16世紀末～ 17世紀初期
17 唐津焼	朝鮮唐津手付水指 共蓋	田中丸コレクション	30	高さ28.3 口径13.7 底径19.7	16世紀末～ 17世紀初期
18 唐津焼	絵唐津点文水指	田中丸コレクション	84	高さ13.0 口径12.2 底径10.5	16世紀末～ 17世紀初期
19 唐津焼	絵唐津草文三足鉢	田中丸コレクション	71	高さ5.6 口径18.3	16世紀末～ 17世紀初期
20 唐津焼	絵唐津草文皿	田中丸コレクション	108	高さ4.4 口径19.2 高台径7.0	16世紀末～ 17世紀初期
21 唐津焼	絵唐津草花文筒形向付 五口	田中丸コレクション	47	高さ9.0 口径5.2 高台径4.1(各)	16世紀末～ 17世紀初期
22 唐津焼	絵唐津草文柿蒂形向付 六口	田中丸コレクション	106	高さ8.2 口径11.2 高台径4.6(各)	16世紀末～ 17世紀初期
23 唐津焼	絵唐津網干文向付 五口	田中丸コレクション	49	高さ5.5 口径17.0 高台径5.3(各)	16世紀末～ 17世紀初期
24 唐津焼	絵唐津木賊文四方向付 五口	田中丸コレクション	50	高さ7.0 口径8.4 高台径4.2(各)	16世紀末～ 17世紀初期

たなかまる 田中丸コレクション 華やかなる九州の桃山茶陶

会期 2024年8月6日(火)～2024年9月29日(日)

会場 古美術企画展示室

共催 一般財団法人田中丸コレクション



出品No.13 絵唐津菖蒲文茶碗 [重要文化財]



出品No.34 褐釉耳付花入



出品No.45 黒釉肩衝茶入 銘「サイノホコ」



出品No.42 藉灰釉耳付水指

桃山時代の茶陶（茶の湯に用いる陶磁器）は、それまでのやきものの常識を覆した大胆かつ斬新なデザインで、日本陶磁史上、これほど自由な発想と創作意欲に満ちた時代はなかったと言つても過言ではありません。

この時代の信楽焼、丹波焼、伊賀焼、備前焼、楽焼、美濃焼、唐津焼、上野焼、高取焼、薩摩焼はどれも一作一作に個性があり、400年近く経った現代でも時代を超えた傑作として高く評価されています。

今回は福岡市美術館と田中丸コレクションの所蔵品の中から、九州を中心とした桃山茶陶の名品を展覧します。

桃山茶陶の展開

■茶の湯の成立と千利休の登場

茶の湯は亭主が小座敷に客を招き、中立（休憩）をはさんだ初座と後座の二部構成で進行します。初座で料理を出し、後座では亭主が席中の風炉または炉に掛けた釜の湯を用いて客の前で点前をし、そして客に茶をふるまうといった飲食儀礼の一つで、室町時代後期に成立します。

茶の湯が成立した後、唐物（中国製の舶来品）を用いる「本数寄」と、唐物と和物（日本製）の日常雑器を見立て併用する「侘数寄」に分化していきます。

本数寄の茶の湯では、中国宋・元時代（960-1368）の高価で希少な唐物を用い、出す料理は本膳料理のように二の膳、三の膳と品数が多く、そのうえ大酒を振る舞うという豪勢で遊興的な茶の湯でした。

一方の侘数寄の茶の湯は、下手（粗雑で安価）の唐物や和物を用い、出す料理も一膳だけと品数も少なく、酒は一献という質素なものだったのです。

桃山時代の天正年間（1573-92）以前の茶の湯は、武家や豪商たちが好んだ本数寄が主流でしたが、ある人物が歴史の表舞台に登場することでその様相が一変します。

その人物こそ、わび茶の大成者と知られる千利休（1522-91）です。

堺の豪商であった宗易（のちの利休）は、今井宗久、津田宗及とともに織田信長の茶堂（主君に近侍し茶の世話を仕事としてしていましたが、天正十年（1582）の「本能寺の変」で信長が斃れると、羽柴（のちの豊臣）秀吉は三人の茶堂をそのまま重用し、今井宗久に代わって宗易を茶堂の首座（最上位の席）に抜擢します。秀吉は天正十三年（1585）に関白に任せられた御礼として、禁裏御所で正親町天皇に茶を献じますが、この時、宗易は正親町天皇より「利休」居士号を勅賜され、秀吉の茶堂として奉仕します。

利休この時、六十四歳。

名実ともに天下一の茶人となった千利休でしたが、それでも侘数寄を貫き、それまでの点前や茶室、茶道具を洗練させて、侘数寄を茶の湯のスタンダードに押し上げていきます。

その様子を利休の弟子山上宗二（1544-90）は次のように記しています。

宗易（利休）ハ名人ナレハ、山ヲ谷、西ヲ東ト茶湯ノ法ヲ破り、自由セラレテモ面白シ

『山上宗二記』天正十六年（1588）

■千利休による茶陶の創作

茶道具はそれまで「見立て」、つまり本来は茶の湯の道具としてつくられていなかったものを転用して用いていましたが、利休は侘数寄の茶の湯（わび茶）にふさわしい茶道具を新たに創作しました。

たとえば、辻与次郎という金工師に阿弥陀堂などの釜を、記三や盛阿弥といった塗工師に棗や水指をつくりさせたり、さらに利休は自ら削った竹の茶杓や竹花入もつくりはじめます。

そして、利休の創作茶道具を語るうえで欠かせないのが茶碗です。

天正十四年（1586）十月十三日、奈良奉行の中坊に仕える井上源吾の茶会に「宗易形ノ茶ワン」が用いられます。これが宗易、つまり利休がデザインして長次郎（楽家初代）という陶工につくらせた茶碗のことと考えられています。

この宗易形の茶碗は、これまでの茶碗とは異なるつくり方と造形をしていました。

唐物・高麗物（朝鮮製の舶来品）・和物を問わず、茶碗というものは通常口クロア成形でつくられますが、この宗易形の茶碗はロクロアを使わず、両手で土をこねて茶碗の形を成形し、笠で削って形を整える手捏ね成形といいます。

また、当時の茶碗は「珠光青磁茶碗」のような平形の茶碗が主流でしたが、利休は「半筒形」という異例の形を採用しているのです。

そして、「宗易形ノ茶ワン」が用いられた天正十四年（1586）を境に、茶会記では唐物茶碗に代わって高麗茶碗や和物茶碗が急増していきます。

前出の『山上宗二記』でもそれを裏付けるかのように次のように説明しています。

唐茶碗ハ廃リタル也、当世ハ高麗茶碗、今焼（長次郎などの軟質施釉陶器）茶碗、瀬戸（美濃焼）茶碗以下マデナリ（形）、コロ（寸法）サエヨク候ワバ、数寄道具ニ候也

『山上宗二記』天正十六年（1588）

唐物茶碗はすでに時代遅れとなり、今（天正十六年頃）は高麗茶碗や長次郎などの茶碗、そして美濃焼（当時、美濃焼は瀬戸焼と認識されていた）の茶碗が流行していると山上宗二は述べています。

こうして利休によって茶道具は唐物から和物中心へ、それも見立てから創作へと時代は転換していきます。

しかし、秀吉との間に不和が生じはじめ、天正十九年（1591）二月二十八日、利休は切腹することになります。

■全国の窯業地で沸騰する新作茶陶の生産

利休の死からちょうど八年後の慶長四年（1599）二月二十八日。

古田織部（1543-1615）の茶会に招かれた博多の豪商神屋宗湛は次のように記しています。

ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ（歪み）候也
ヘウケモノ（瓢軽な物）也

こうして慶長年間（1596-1615）になると、全国各地の窯業地で茶陶の生産が最高潮に達していました。

■型破りな慶長年間の茶陶

慶長年間の茶陶は、造形、装飾、器種において大変革をとげることになります。

利休が活躍した天正年間は、桃山時代とはいえ室町時代の余韻が未だ残り、「冷え枯れる」という古典的な美意識を纏う静謐な茶陶にとどまっていましたが、慶長年間になると異風で奇抜な「傾く」という世相を反映した自由奔放なデザインの茶陶がこれに加わっていくことになります。

造形の点では、洋の東西を問わず、「うつわは円形で左右対称」という常識を覆していきます。花入、茶碗、水指、建水などに大胆な笠目と歪みを加えて左右非対称の形にしたり、向付や鉢などの懐石食器では型による成形（型打成形）によって日本の匠の洲浜、島松皮菱、扇など円形以外の形をつくりだします。

また、装飾の点では、美濃焼と唐津焼が国内初の下絵付けの技術を開発したこと、素地に筆で文様を描くことができるようになり、より装飾的な茶陶がつくれられるようになります。利休の頃までの茶陶は無地無文が原則でしたが、美濃焼や唐津焼はこの原則を破り、自然の風物や幾何学的な文様を描いた茶陶が登場します。このほかにも釉薬と釉薬を掛け分けたり、釉薬と下絵付けの組み合わせなど、京の都で流行する「片身替」や南蛮文化を巧みにデザインに落とし込んだ茶陶がつくられます。

器種の点では、天正年間までの懐石食器は漆器で占められており、やきものでは稀に土器が用いられていますが、向付、鉢、蓋物、徳利、ぐい呑など、やきものが食器や酒器の分野に進出していく、現在、私たちが用いる陶器製食器の原型がこの時代につくられることになります。

■新作茶陶を用いる古田織部

利休の死からちょうど八年後の慶長四年（1599）二月二十八日。

古田織部（1543-1615）の茶会に招かれた博多の豪商神屋宗湛は次のように記しています。

ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ（歪み）候也
ヘウケモノ（瓢軽な物）也

『神屋宗湛日記』

宗湛は薄茶の時に出された美濃焼の茶碗が大きく歪んでいて、まるでおどけているようだと感想を記しています。茶会記にわざわざそのように書き添えているところを見ると、よほど強烈な印象だったのでしょう。

それから、備前の次に多いのが唐津焼です。花入、茶碗、茶入、水指、向付、徳利と多くの器種を用いています。

開窯まもない唐津焼は慶長七年（1602）十二月十四日の「からつやき皿 水指はからつやき」（『今井宗久茶湯書抜』下）が初出で、以降、慶長十二年（1607）までの間に集中して用いていることがわかります。

慶長八年（1603）八月十七日には「水さし唐津足有 茶碗唐津 からつやきのさら 酒つきはから津やき」と一會に四つもの唐津焼を用いていますので、余

式の時に履く足全体を覆う「覆物」のことで、この時に用いられた茶碗は黒い釉薬に覆われ、底が扁平で橿円形をしており、今で言う「瀬戸黒茶碗」を思わせます。

利休や秀吉など数々の茶会に参画する宗湛さえもまだ見たことのない異様な茶碗を織部は用いたのです。

伊賀焼は掛花入と水指の記載しかありませんが、慶長十三年（1607）正月七日の「水指いかやきひやうたん成」（『今井宗久茶湯書抜』下）が初出で、この記述によれば瓢形の水指を用いたようです。

■歪んだ形の茶陶や織部焼の生産に古田織部は関与したのか？

ところで、古くから歪んだ形の茶陶や織部の名を冠した織部焼は「織部好み」と言われ、古田織部の好みを反映した茶陶を考えられています。

こうしたことがいつ頃から言われるようになったのかを調べてみると、「江之宗左茶書」「午ノ二月 御茶湯之覚」のなかの寛永十九年（1642）二月十三日に「御茶碗 高麗 織部、同年三月十七日に「御茶碗 松皮菱、扇など円形以外の形をつくりだします。

利休亡き後、慶長年間の茶の湯をリードする古田織部。

「数寄ト云ハ、違而スルガ易（宗易）ノカカリナリ」（『四祖伝書』）と言うように、織部は利休の「茶の湯は人と違って工夫すべし」という教えに従って、師の利休とはまた違った茶風を試みます。

織部が活躍する時期と歩調を合わせるように全国各地の窯業地では、それまでの茶道具から逸脱した大胆な笠目と歪みを加えた茶陶や装飾的な茶陶が生産されます。このほかにも釉薬と釉薬を掛け分けたり、釉薬と下絵付けの組み合わせなど、京の都で流行する「片身替」や南蛮文化を巧みにデザインに落とし込んだ茶陶がつくられます。

器種の点では、天正年間までの懐石食器は漆器で占められており、やきものでは稀に土器が用いられていますが、向付、鉢、蓋物、徳利、ぐい呑など、やきものが食器や酒器の分野に進出していく、現在、私たちが用いる陶器製食器の原型がこの時代につくられることになります。

器種の点では、天正年間までの懐石食器は漆器で占められており、やきものでは稀に土器が用いられていますが、向付、鉢、蓋物、徳利、ぐい呑など、やきものが食器や酒器の分野に進出していく、現在、私たちが用いる陶器製食器の原型がこの時代につくられることになります。

たとえば、向付では慶長六年（1601）七月二十日に「せ戸四方さら足の付候」（『今井宗久茶湯書抜』下）とあり、現在で言う志野の向付を思わせる記述があります。考古学上では志野の生産は1598年以降との見解がありますので、織部は新作の志野をすぐに茶席に取り入れていることがわかります。

次に多いのが備前焼で、掛花入、水指、建水が用いられています。

興味深いのは、慶長六年（1601）正月二十四日に備前花入を床正面の中釘にかけて柳と梅を入れ、柳は「たゝみ（畠）に一尺たまり申程に入申候」（『今井宗久茶湯書抜』下）とありますので、現在、初金で見られる「結び柳」のよう床飾りをしているようです。おそらく、この結び柳というのは織部が考案したのでしょうか。

それから、備前の次に多いのが唐津焼です。花入、茶碗、茶入、水指、向付、徳利と多くの器種を用いています。

開窯まもない唐津焼は慶長七年（1602）十二月十四日の「からつやき皿 水指はからつやき」（『今井宗久茶湯書抜』下）が初出で、以降、慶長十二年（1607）までの間に集中して用いていることがわかります。

利休も所持した茶道具や好みの茶道具を花押を漆書きした例がありますが、この茶碗はおそらく後者で、織部が美濃焼の窯場に直々に赴いて焼かせた可能性が高いと考えられるのです。

このように、織部が「織部好み」の生産に直接関わっていたことを示すのは、今のところこの花押のある茶碗のみという状況ですが、近年、織部が好んだ形の茶碗や九州の上野焼、薩摩焼の生産に直接関与して

いたことを示す興味深い史料が発表されています。

また、織部が好んだ形の茶碗に関して、織部の弟子上田宗箇（1563-1650）の聞書をまとめたとされる『宗箇様御聞書』のなかに織部が好んだ茶碗は次のような形だったと述べた箇所があります。

織部切形ト云茶碗ハ、平ニシテ三角ノ様成茶碗ヲ、織部切形ト云也

『宗箇様御聞書』上田流和風堂藏

織部が好んだ形は、高さが低く、上から見ると三角形のように歪ませた茶碗だったと述べています。これは織部焼でつくられていますのでこうした形の茶碗は、織部からの注文と言えます。

ちなみに、この切形というのは茶道具を職人に注文する際に、実際にその形を紙に切って形・寸法・文様を伝える注文方法で、利休もこのような方法で注文していました。次に、織部が上野焼の懐石食器について意見を述べた史料で、要約すると次のようない内容です。

豊前国小倉藩細川家の家老松井康之が皿五種を焼かせて織部に意見を求めたところ、焼き具合は良いが、形と寸法が良くないと評され、再び指示を出すのでまた焼かせて送ってほしい。

古田織部書状 慶長十五年（1610）八月十五日付
松井康之宛 松井文庫蔵

最後に、薩摩焼の肩衝茶入に対し、織部がアドバイスをしている史料です。

自身の代わりに上田宗箇を薩摩に行かせて茶入を焼かせたが、散々な出来映えだったと酷評し、さらに島津義弘が送った二個の薩摩燒肩衝茶入は、二つとも形は良いが釉薬が良くない。黒い釉薬を多くして、あちこちに白い釉薬が入るのが良い。形はもう少し背を高くして大きくなり、尻（底部）はすばまらないように。口と肩はこれで良い。

古田織部書状 慶長十七年（1612）十一月二十二日付
島津義弘宛 東京大学史料編纂所蔵

二つの書状を読むと、窯業地を抱える藩主らが織部に見本を示し、それに對し織部が形や寸法、施釉の仕方まで具体的なアドバイスをしている様子がわかります。

気になるのは、弟子の上田宗箇をわざわざ薩摩まで派遣して茶入を焼かせている点です。織部好みの茶入をつくるために宗箇自ら作陶したか、もしくは薩摩焼の陶工を指導しに行ったのでしょうか。

こうした織部のアドバイスは上野焼や薩摩焼だけではなく、他の窯業地でもあったことを想像させます。

織部好みという型破りな茶陶をデザインしたのが本当に古田織部かどうかは、もう少し具体的な史料が欲しいところです。

「一般財団法人田中丸コレクション」学芸員 久保山炎]